第五章　災害

第一節　洪水による皆損免状

覚

一高百八十八石三斗七升　　中富村高辻

此反別

上田三町八反六畝三歩

八拾年以前ヨリ拾九年以前迄年々川欠

中田壱町四反九畝壱歩

内四反八畝拾壱歩　　年々川欠

残壱町弐拾歩　　当午水くさり皆損

下田弐町三反拾五歩

四反弐拾歩　　年々川欠

内壱反弐拾九歩　　当午川欠

八畝拾弐歩　　当午砂埋

残壱町七反拾四歩　　当午水くさり皆損

上畑壱町七反三畝弐拾六歩

八拾年以前ヨリ拾九年以前迄年々川欠

中畑六町五反三畝壱歩　　年々川欠

下畑拾参町二反九畝弐歩

七町九反五畝拾六歩　　年々川欠

内壱反四畝歩　　当午川欠

七反拾七歩　　当午砂埋

残　四町四反八畝弐拾九歩　　当午水くさり皆損

高外

一新畑拾町三歩

内　弐町三反弐拾七歩　拾七年以来去巳ノ年迄川欠

弐反三畝拾六歩　　当午川欠

壱町六反六畝弐歩　　当午砂埋

残　五町七反九畝拾八歩　当午水くさり皆損

右者当午年洪水ニテ、田畑作毛不残水くさりに付、

当物成令赦免者他

元禄三年午十一月十五日

大嵩　長蔵　印

錦織九兵衛　印

大草　平内　印

中富村

名主

百姓

午年九月、未曾有の大洪水により、田畑の作物は残らず水でくさり皆滅的打撃を受けたのである。年貢は免除するとい

う文書である。古文書全体を通して全滅はこの年だけである。

第二節　安政大地震

乍恐以書附御届奉申上候

一、當月二日夜四ツ時頃と覚大地震ニ而……鎮守八幡宮殿并寺院堂社民家棟数三拾三軒過半相潰……

一、小糸川附字元御休場ヨリ釜神通り中富村江之道筋長三百間程平地著割地形壱尺余高低ニ相成候場所往来差支漸々歩行路土普請取繕

一、野田竹藪等へ小屋掛い多し男女共雨露相凌（しのぎ）……

地震の被害を領主に届けた書状である。安政二年（一八五五年）十月二日夜十時頃の出来事である。貞元に残されていたもので被害の状況を知ることが出来る。神社、お寺、民家の過半数が潰れ更に釜神から中富まで五四〇米、地割を起し三〇糧余の高低が出来、歩行にさしつかえるので道普請で通れるようにした。余震が続いているので田圃や竹藪に小屋を建て寝泊まりした。怪我人もなく牛馬も無難であったのでこの上は平穏を祈るだけである。この事から判断して中富も同様で大きな被害があったと思われる。

安政二年卯十月五日　　上総国周准郡貞元村、

第三節　関東大震災・座談会

今から七十二年前の大正十二年九月一日、午前十一時五十八分、遠くからゴオーッという音が近づいて来るや否や、突き上げられるような上下動から、大きな横揺れでたちまちにして家や土蔵が崩れ落ちた。安政二年の大地震から六十八年目の出来事である。七〇年周期説やらで最近、地震が話題になっていた矢先、千葉県東方沖地震、北海道はるか沖地震、阪神大震災と続き、この関東にも再び大地震が来るのではないかという一抹の不安が今後も続きそうである。

東京を中心に潰滅的な大災害をもたらした関東大震災は、この中富も同様、村半分の二十二軒の母屋が潰れるという大きな被害がでたのである。然し地域の状況については確たる記録もなく、当時の小学生も既に八十才を過ぎ、子供から孫へ伝えられた話も遠い昔の出来事として記憶から遠ざかり、九月一日の防災の日を知る程度である。

今回、当時の様子を記録するため、この中富で地震を体験した八十才以上の方に集まって頂き、座談会を開催したところ昨日の出来事のようにその時の様子を話してくれた。

齋藤　聰（六右衛門）

始業式が終って家に帰って昼飯後、昼寝をしていた。大きな揺れに驚いて庭にとび出した。歩くことが出来ずころがっていた。母屋の障子、戸が飛ぶようにはずれた。土蔵の土が崩れ落ち、骨組を残してハダカになった。母屋は半潰れになった。

齊藤　俊雄（湯屋）

学校から帰り昼飯を食べていなかった。隠居の方に居たので揺れと同時に庭に飛び出したが、ころんで這って逃げているところ、目の前で母屋が潰れた。余震が続き竹藪に蚊帳（かや）をつってしばらく寝ることになった。

齊藤　孝一（嘉平衛）

昼飯を食べようとしたところで茶碗を持ったまま庭に飛び出した。後で家中の者達に笑われた。母屋の梁が戸棚にかかったのでペチャンコにならなかった。

齊藤　芳（作平）

昼飯を食べ終ってから釣りに行こうと思って源兵衛に行った。その時地震に遭遇した。大急ぎで家に引き返したが途中道路が割れ、青いヘドロと水がふき出していた。家に帰ってみると母屋が土台からはずれ、南へ移動していた。

齊藤　国一（清藏）

坂井醤油へ仕事に行っていた。昼飯を食べ終って休んでいたところ大地震で北の倉庫が潰れ、乗って来た自転車がペチャンコになってしまった。歩いて家に向ったが妙見様の山が崩れ落ち、小糸川を塞いだので水が溢れ、後生橋は渡れず、泳いで横切って家に帰った。竹藪で一週間過した。

齊藤　直（紺屋）

昼飯を食べていなかった。大きな揺れで庭に飛び出したところ、土蔵が潰れた。四時間後、余震で母屋が潰れた。庭が割れて水を吹き出していた。三左衛門で子供が下敷きになったとかで大騒ぎであった。

齊藤　重太郎（重兵衛）

昼飯を食べていなかった。大きな揺れで庭に飛び出したが歩くことが出来ず這っていた。伝助（南隣り）から地割れが走り、目前で母屋が潰れた。

石川　徳太郎（平兵衛）

隣りの家の倒壊で母屋が押し潰された。妹が二人とじこめられたが間もなく助け出された。余震が続き前の権十の竹藪に蚊帳をつり、しばらく暮らした。

集まっていただいた方々は当時十二、三才であり、少年時代の思い出を語るが如く、一言一句に目が輝いていた。貞元小学校も全壊しその後、子供達は二年間法厳寺や上湯江のお寺に通うことになったのである。

中富の家屋の倒壊状況は前述の如く、母屋が二十二軒、他はほとんど半壊であったが、起こして柱を入れたり家直しをして住んだようである。お寺の本堂、神社の拝殿、行屋、共に潰れたが後日、区民の献金や奉仕活動により再建されたのである。

情報機能のマヒした状況の中で、異国人が暴動を起し房総方面に来るという流言飛語から中富へ入る道路の要所には、消防団を中心に若者達で組織された自警団が立番に当った。竹槍や刀を持って見知らぬ人をきびしくチェックした。

貞元地区の住家の全壊は一二二軒、半壊四十八軒、非住家の全半壊一七四軒、死者男三人、女二人となっているが幸い中富には人身の被害はなかったようである。

家屋の倒壊は小糸川両岸の地盤の軟弱な土質の上に建つ家が多かったようである。現在、中富の各住家は戦後ほとんど建て替えられ、震災の跡は何処にも見当らない。同じ場所に住むかぎり再び大地震の起きたとき、心配である。

第四節　洪水と河川改修

大雨が降れば洪水で田畑は水没し、時には収穫が皆無となる。畳を台の上にのせ、更に家財道具をその上に置いて水の引くのを待つ。この中富に人が住みついた時から、繰り返してきたことだろう。現存する数多い古文書の中には水とのかかわり合がたくさん記されている。川を境界としたことから近隣との土地争い、減免の願い文書、住居の移転等、水との戦いの歴史である。

今からおよそ三百年前の元禄時代、この中富を水難から救う道は唯一つ、小糸川を直線にすることであるとして、時の地頭、大草平内の計らいにより成就し、その偉業を讃える行事が今も続いている。

しかし川幅はせまく、堤防もなく両岸には女竹が生い茂り増水時の流れは悪く、田畑に溢れ出すことはしばしばあったようである。更に洪水の頻度を増すことになったのは、下湯江から中富に至る控え土手にあるという。明治十九年、中富の大反対を押し切って強行し、築き上げたのである。小糸川から溢れた水をせき止める事になるので、再び中富は水没を繰り返すことになったのである。それ以後中富と下湯江の間で嫁、婿の話は消えたと伝えられている。

昭和十年代、江川の堤防は時々決壊しトロッコで土を運び修復していた。雨脚の早くなってきた夜中、ヴオー、ヴオーと村役人の吹く螺貝の音に、父親が大急ぎで蓑、笠をつけ、鍬とカマス（藁で作った袋）を持って、素足でドシャ降りの暗闇に消えていく後姿を幾度となく見てきた。カマスに土を入れ、決壊しそうな場所に集まって、水の引くまで見守り続けたそうである。

昭和二十年八月二十三日、終戦から一週間目の出来事である。中富に駐屯していた百数十名の兵隊は本部からの解散命令を待っていた。前夜から間断なく降り続く豪雨は翌朝も止む様子はなく、各戸ではそれぞれ洪水への準備を進めていた。予想通り午前中から小糸川が溢れ出し、まもなく周辺は海のようになり中富は孤立した。中町の通りは今より低かったのか、大人の股ぐらいの深さがあり、濁流が東から西に向かっているので平四郎の前の十字路を横切って北町へ行く事は困難であった。神社の周辺の家をのぞいて、ほとんどの家が床上か庭先まで冠水した。糞も味噌も一緒という言葉があるが正にその通りで、親の心配をよそに子供達は道路を流れる汚い水にはいって田舟を浮かべてはしゃいでいた。時に小生、

中学生の十四才であった。やがて下湯江の控え土手が大きく決壊し、ようやく水が引き始めた。一難去り、改めて敗戦の重大さを知ったのは月末になってアメリカ軍の進駐が始まってからであった。

昭和二十二年頃であったか、記憶はさだかではないが、小糸川拡幅のための測量が始まった。手伝いが各地区に割当になっていたようで、その日、中富から二名という事で重兵衛の重太郎さんと巻尺を持って川の周辺の田畑を歩き回ったことがあった。昭和二十四年の春休み、川岸の土をシャベルで切り崩して流す作業にアルバイトで参加した。日当百九拾円で結構稼ぎになった。当時ニコヨンと言って成人男子の労働日当は二百四拾円であった。

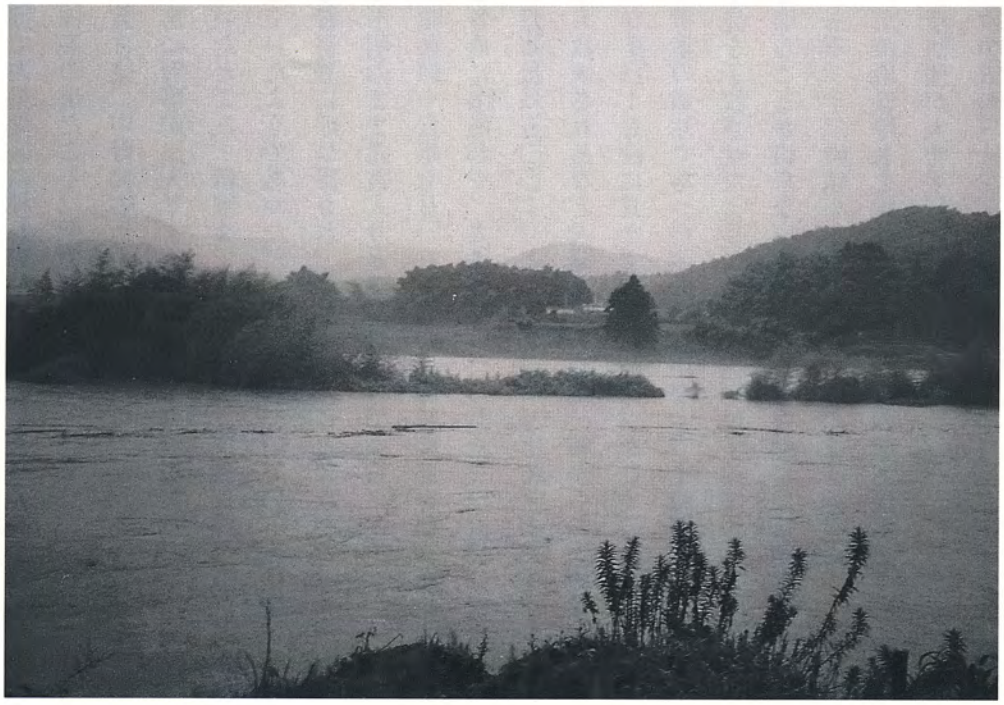
昭和二十六年、堤防が出来上り、広くなった川幅を見渡せるような高い位置に念願の後生橋（木橋）が完成した。竣工式、渡り初めがあり、夜には開通を記念して神社の境内で中富青年団員による素人演芸大会が開催され大賑わいであった。

拡幅と堤防の完成により、田畑の冠水はほとんど無くなったが、昭和三十三年頃か、堤防を越すような大雨に見舞われたことがあった。後生橋の流失が心配されたが、中野側の堤防が決壊し水位が下がり難をのがれたという。濁流は田畑を抜けて人見地区に押し寄せ、夕食時に突然の床上浸水で大きな被害の出たことは記憶に新しい。

数日後、中野側の土手の決壊口に鍬の跡があったことから中富に刑事が出入りするようになった。事実畑の手伝いをしていたところ、田圃まで刑事が来て、父親を呼び道端で質問していたようであった。部落の役についている人は殆ど木更津警察署に呼び出され、尋問されることになった。結局犯人は不明のまま迷宮入りとなったようである。

昭和四十五年七月一日、この日房総南部を襲った集中豪雨は各地に山崩れや、大洪水をもたらした。一説には清澄山系の降雨量は五〇〇ミリとも六〇〇ミリとも言われ、テレビ等にも放映されるなど大騒ぎであった。朝からの大雨は自動車のワイパーも役に立たず、正にバケツをひっくり返したという言葉の通りであった。雨止みがなく、十時頃に各学校では生徒を下校させたようであるが列車はすべて不通で、高校では帰ることが出来ない生徒があり体育館に急遽宿泊させたのである。十二時頃小止みとなり、このまま過ぎるかと思っていたが川は増水を続けていた。中富の床上浸水を予測して貞元消防団が大勢手伝いに来ていた。

夕方五時三十分、道路に濁流が入って来た。それからわず

か三十分で中富は孤立した。小糸川の堤防から一米近く水が盛り上がって見えたという。更に後生橋の上流三〇〇米、中富側の堤防が長く決壊したので、小糸川から大量の水が真すぐに入って来たようである。周辺は濁流が渦巻き外部との連絡は電話だけとなった。消防団員も帰ることが出来ず、公会堂に宿泊した。中富に嫁いで初めての洪水を体験した若い主婦や子供達は大変な驚きようであった。しかし大水に慣れている年寄りは極めて平静で、床上浸水でも畳を濡らすような事はなかった。明朝、下湯江の控え土手が決壊していた。稲は幼穂形成期に入っていたが被害はなかったようである。

翌年から川幅を更に広げようということで土地の測量が始まった。川を直線にするため中富側の田畑が広く買収されたようである。橋は継足して渡っていたが木橋であり並べた板が車の通るたびに、カタカタと音がするので木琴橋と呼んでいる人もいた。現在の橋は昭和五十八年、総工費一億八千万円をかけ、木橋より七〇米上流に完成した。